

Title	徳永重良著 イギリス賃労働史の研究：帝国主義段階における労働問題の展開
Sub Title	A study on history of British wage-labor : the development of industrial relations on the stage of imperialism, 1967, by Shigeyoshi Tokunaga
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.2 (1968. 2) ,p.251(141)- 255(145)
JaLC DOI	10.14991/001.19680201-0141
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680201-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680201-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都市経済政策に等しいと述べていられる。(三八一頁)

第四章に資本主義があらわれている。本書が「西洋古代・中世経済史」と云う題名であることからすると読者はその理解にとまどうかも知れない。だが古代・中世社会の経済を現代から識別し、その発展性を確かめる意味でも資本主義を論ずることはこの著者にとって当然のことなのである。

第一節 資本主義の概念について著者は、思想の盲点についてウェーバー批判をのべていられる。思想家は屢々自己を対象外におき立論する場合が多い。例えば経済学とは経済学者にだまされぬようにすることであるという場合、この提言者は自己がだます側にはないと云う立場に立って発言しているのである。

資本の生成が多元的であるように歴史的には資本主義(経済制度)もまた多元的である。

農村社会では子を生む「元」または「親」という觀念が資本概念の源であったと著者はのべていられる。(三八五頁)

このような形で資本主義の主体的条件としての資本主義精神と客体的条件としての資本主義的技術について著者は言及している。

古代の資本主義 中世の資本主義を観念的に扱うことにつき、第二節 公正価格、徴利禁止の経済性を論じていられる。つまり経済が倫理や価格の抑制によっては統御され得ないこと、したがって第三節 貨幣を媒介として経済がおしすすめられてきたことについて論じている。第四節の資本家について吾々は *Essai sur la nature du commerce en général* 1755. 著者 Richard Cantillon 女史の

一四〇 (二五〇)

*Entrepreneur* (p. 388) を想起する。このようなものとしてフックーイやメヂチをあげ、カトリック信者もまたそのような広義の経済人としていわゆる資本家の源流に入れておられる。之はまさしくウェーバーアンにとつてなげかわしいことにちがいない。しかし歴史主義とはそのような形で非歴史的、社会学的批判のもとで自己展開をよける運命におかれている。

最後にこの書のぶざまな書評を終るにあたって、ラトゥンシュヤリェトゲ教授がそれぞれの創意を示し乍らも、フランスやドイツのそれぞれの学界の研究史に深く根ざしているように、日本の西洋経済史研究も独自の研究方向がこのような著作によってオリエンティールンされることを祈ってやまない。

著者の御好意に甘え、暴言を心からおおわびする。

一九六七年十二月八日

(ミネルヴァ書房・A5・四三七頁・一八〇〇円)

徳永重良著

### 『イギリス賃労働史の研究』

——帝国主義段階における労働問題の展開——

飯 田 鼎

第二章	帝国主義段階の労資関係(概説)
第三章	熟練の変質と労務管理
第四章	労働市場と賃金水準
第五章	賃金構造
第六章	賃金形態
第七章	労働組合運動
第八章	結論

本書は、きわめてユニークな研究である。そのユニークである点のひとつは、その対象が、イギリス機械工業を中心とする資本と賃労働との関係の分析にその焦点がしぼられていることであり、第二に、それは、その副題にみられるように、帝国主義段階、すなわち、一八七〇年代から一九一〇年代にかけての複雑多岐な労働問題を、著者独自の視点から分析を試みたものであるからである。

従来、外国の労働問題の研究といえは、大体において、労働組合ないし労働運動の歴史的記述が中心となっており、ウェッブ夫妻やコール等の歴史的研究の上に依拠してきたわが国の研究水準の制約がみられたのであるが、本書は、そのような制約を打破し、まさしく「帝国主義段階における労働問題の展開」(傍点筆者)として、運動の基盤をなす労資関係、労働市場、賃金構造とそれとの関係について、機械工業を中心として分析を試みている。読者の便宜上、つぎに主要な目次をかかげておこう。

序章 自由主義段階の労資関係

本書の内容を以上のような特異なものたらしめた契機について、著者は、「はしがき」においてのべているが、これはなかなか示唆に富み、いわば本書の成立の動機について語っている。著者はまず、その労働問題研究への志向を、かの「社会政策論争」に見出し、その後のこの論争の発展過程にあらわれた「出稼ぎ型」論、「半農半工型」論、「日本賃労働史論」、京浜工業地帯の「労働市場の模型」等の実証的・理論的研究に刺戟されながら、一方において、わが国労働問題研究に固定的にあらわれている「型」の論理と、他方において根強い政治至上主義的な労働問題研究の態度にたいして批判的な態度をとることに見出したという。こうした視点から、まず第一に、(一)一国の労働運動にはそれ特有の性格があり、その国の資本主義の発展とかわつており、先進国イギリスをモデルとし、他国の現状をそれからの偏差とし把えるのは正しくない。(二)帝国主義段階の問題を整理することによって、日本の問題を、理論をふまえてひとまず世界史の発展傾向をつぎとめることによって、日本の地位を確定することの重要性。この二つの前提の上に立って、「事

実をできるだけ前面におし出す」叙述法をとってまとめられたのである。つきに、本書の内容の評価に入ろう。

## 二

本書の第一の特徴は、まずその手堅い分析的な手法である。労働問題の研究によくみられがちな叙述的な手法のみにおちいることなく、著者の鋭い分析力にじみ出ており、とくに第二章および第三章はすぐれていると思われる。つきに、おどろくほどの実証性である。分析の基礎に、具体的な事実の把握を示す資料——主として統計および図表が実に豊富に掲げられており、とくに第四章および第五章においていちじるしい。これは、著者が「事実をできるだけ前面に出す」という主張にもとづくものである。

つきに本書の最大の特徴は、著者の広汎な視野である。労務管理、労働市場、賃金、賃金構造および形態および労働組合運動などの各分野について、機械工業を中心に帝国主義段階の諸特徴を分析している点であり、これは、現在、わが国において多元化しつつある労働問題研究の分野の広さを反映したものである。

著者は、帝国主義段階の労働問題にふれるにあたって、自由主義段階の労資関係を規定し、産業資本段階Ⅱ綿工業における労資関係をその典型的なものとしてとらえ、これにたいして、機械工業を對比せしめることによつてはじめる。すなわち、賃労働、労働組合および労働力政策の各指標について、この両者を比較している。しかしこれは、帝国主義段階における機械工業の労働問題を取りあつか

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのイギリス機械工業において展開された以上のような主要な技術的变化の性格について、著者はさらに、それらの諸変化の、ドイツやアメリカに比較しての特殊性、産業革命以来の長期にわたる技術的蓄積を基礎とする技術的諸変化は、急激な変化を抑制し、新興国ドイツおよびアメリカの象徴としての内燃機関にたいして、技術的伝統としてのイギリスとの対照、そして第二に、それにもかかわらず、大企業と中小企業との間の技術的な格差の存在を指摘している。

以上のような技術的な諸変化から、経営形態の変化、すなわち、一九世紀末における独占的集中の進行、巨大独占体の成立が導き出されるとともに、それらが、労資関係および帝国主義段階の労働問題に決定的な影響を与える点を考慮する。労資関係の面では、この段階にあつて特徴的な事実、機械金属工業の分野においても失業問題の激化であり、相対的過剰人口の漸次的増大と都市および農村における停滞的・潜在的過剰人口の問題、すなわち、不完全就業や自由労働の問題とともに労働条件の切り下げが行われたこと。第二に、機械工業などの重工業部門における熟練の分解、徒弟制、半熟練労働者の熟練労働者にたいする代替的現象の一般化が現われるのであるが、一方においてこのような手工業的熟練は、機械制大工業の段階においては不要となる傾向を示しつつも、重工業の場合は、男子労働力を主体とする高度の熟練および技術水準が、多量に要求される結果として、個別企業内における独自の労働力の養成が行われる必然性。第三に、労務管理の問題であつて、巨大企業における科学的

うための便宜のためである。

著者は、帝国主義段階における労働問題の研究を、機械工業をとりあげた理由について、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけておこなわれた一連の技術上の諸変化——電力革命——は一八世紀から一九世紀にかけての産業革命に匹敵しないまでも、重要な技術的な発展であり、近代的化学工業の展開にもなう技術的発展は、機械工業の場合、そこにおける技術的变化と経営形態の面ではいちじるしいものがあつたことを指摘する。すなわち、機械工業の技術的变化の第一として、従来までの織維機械、農業機械、鉱山機械、蒸気機関、造船にたいして、電気機械と自動車の製造部門が加わつたことである。第二には、造船業・船用機関工業における大型化、それを可能にしたところの第一の条件として鉄船から鋼船への転換、第二の条件として往復機関（いわゆるレシプロ (Reciprocating) からタービンへの移行）、第三の条件として、水圧鉋打機などの導入による機械化の進展などがあげられる。つきに第三には、帝国主義段階においては、新しい工作機械・工具・器具の導入、すなわち機械工場における多量生産に圧倒的な強みを発揮するターレット旋盤および絞盤の出現、あるいは研磨盤のほかに、堅型中ぐり盤などが進んだ工場にとり入れられ、こうした切削速度の大きな機械は、さらに新しい工具、器具、ひいては新しい生産方法の出現をうながす電力が原動力として登場する必然性もここにあつた。もちろん、こうした新式の機械・器具の導入は、大企業に限られていたのであつて、中小企業の大部分はあまり関係がなかつたと指摘する。

管理法、出来高給、能率給の採用、鉄鉱業や炭鉱業におけるスライディング・スケールの実施、利潤分配制の導入などがすでに行われた。以上のような産業構造および労資関係の変化に照応して、労働者階級の組織にも変化がみられたのであるが、著者は、新組合主義Ⅱ一般組合およびその政策についてふれ、その結果としての社会政策、社会保険について簡単な説明を加えている。

以上のように、独占段階の到来にもなう産業構造、生産方法の変化、労働者組織の変貌の結果についての予備的な考察ののちに、著者は、熟練の変質と労務管理、すなわち、(一)作業内容の変化、(二)技能養成方法の変化、そして第三に労務管理方式の転換について詳細に検討していくのであるが、この第三章の叙述から以後、内容は分析的ではあるが、資料的となり、論理的な究明よりも、具体的な素材の提示が目立つようになり、第二節労務管理を除けば、やや素材的でありすぎるような感をうける。そしてその傾向は、第四章および第五章に至つて、ますますいちじるしくなるのである。ここにまた本書の特徴がみられるのであつて、独占資本主義段階における機械工業の労働諸条件にかんするきわめて貴重なデータとして注目すべきであろう。第七章は、一八八〇年代の労働組合運動における機械工組合の役割について考察している。つきに本書全体の評価について述べることしよう。

本書の研究書としての価値については冒頭において指摘したもので、ここでは弱点と思われる点について指摘しておこう。本書は、

その資料的な価値と実証性にもかかわらず、理論的な整理が必ずしも充分とはいえない。すなわち、さきにも指摘したように、前半においては問題意識が鮮明で、帝国主義段階における労働問題の特殊性についての理論的考察がなされているのであるが、後半においては、資料負けの感が深く、資料の解説に終始しており、叙述が単調である。第四章、第五章、第六章以下の叙述にみる叙述の単純性、本書の前半にみられた理論的分析の鋭さが、後半において、その資料的豊富さのなかにかくされてしまったのは何故であろうか。そのひとつの原因は、労働市場と賃金水準、賃金構造、賃金形態および労働組合運動の各項目が、バラバラに並列的にとりあげられているだけで、これら相互の間の関係、これらの諸関係の法則的な把握がみられないことである。これは、著者が、現代のわが国における労働問題研究において、その研究水準の見事な向上にもかかわらず、ともすればバラバラになろうとする各研究分野、すなわち、労働市場論、賃金論、労使関係論、社会保障論、労働組合論——本来、「労働問題」として把握されるべきこれらの分野——を統一的に把握しようとする苦闘のあらわれであることは高く評価しなければならぬのであるが、この試みは、著者の努力にもかかわらず、本書においても成功しているとはいえない。これをつきつめていくと第二の問題となるのである。——帝国主義段階における労働問題の展開——のために、機械工業をえらんだ意図は斬新であることはいうまでもないが、しかし、帝国主義段階の労働問題において画期的な役割を果たしたのは、炭鉱労働者を先頭とする不熟練労働者とその組合である

ることは周知の事実である。だとすれば、こうした労働者階級の状態およびその組合といわば労働貴族的存在としての機械工の比較対照の欠如が、著者の意図をいぢるしく稀薄なものとしたとはいえないだろうか。少なくとも、第七章において、この点を十分に強調すべきであった。また帝国主義段階における機械工業についてふれる場合、ミッドランドに広く散在している中小経営とこの上に聳立する大企業との支配・従属の関係、まさしくシドニー・ポラードがとりあげたような問題および視角が少しはふれられているが、ほとんど閑却されているのは何故であろうか。この問題を無視しては、帝国主義段階における労働問題を正しく把握できないように思う。すなわち機械工業における賃金水準・賃金構造などの労働条件の分析においては、きわめて周到な注意が払われているのであるが、その分析の焦点は機械工業内部の各職種を中心とする側面にとどまっております。機械工業自体の構造の独占資本主義段階Ⅱ帝国主義段階における変貌、資本の集積・集中にともなう巨大独占企業の成立、それに必然的に伴う労働諸条件の企業間格差の拡大については、ほとんどふれていない。もちろん、それについて著者は、「企業別格差を直接示すようなデータはほとんどない。問題意識の欠如は、この種の格差が当時のイギリスにおいて概して重大なものではなかった、ということを物語っている」とのべ、産業別格差についてもほぼ同様なことをのべているが、(二三六頁、二四五頁)それは事実であるとしても、本書が、その副題として、とりわけ、「帝国主義段階における労働問題の展開」(丸点筆者)と限定している以

上、今少し、この問題について配慮できなかったのであろうか。最後にいまの問題にも関係があるのであるが、著者は、「はしがき」においてのべたように、従来のわが国に根強くみられた政治至上主義的ないし政治追従的な労働問題の研究の態度に批判的態度をとられる。これは正しい。しかしそれがあまりにも自己抑制的となり、まさしく、帝国主義段階における労働問題をとらえる場合に、この時期における労働組合運動の位置づけについては成功しているとはいえない。ここでも、やはりさきの場合と同じく、「帝国主義段階」とはいかなる「段階」であるかという基本的な視点の認識において、必ずしも充分とはいえない面がありはしないか。第七章が宙に浮いていて全体を総括する形になっていない。

以上、失礼をも顧みず、かなり思いきった批判を試みたが、しかし本書は、戦後のわが国にあらわれた外国の労働問題の研究において、まず第一に指を屈すべき力作であろう。筆者も啓発されることきわめて多く、とくに、労働問題研究の方法として、賃金、労資関係、労務管理、労働組合、社会保障を統一的に把握することの必要を痛切に教えられた。著者の広大な視野と大胆な着想、綿密な分析力に深く敬意を表するとともに、このつたない批判が著者を傷つけ、あるいはいぢるしいのはずれではなかったかをひたすらにおられる。著者の懇篤な御教導をお願い致す次第である。(法政大学出版局・一九六七年七月刊・A5・三七一頁・一、二〇〇円)

〈追記〉 わたくしは、本書出版直後、著者から寄贈をうけ、また図書館新聞から簡単な批評を依頼されたのであったが、当時は病氣中のこ

とではあり、十分に読む機会もなく、心ならずも不十分な書評を書いてしまった。後に、本書をゆっくり目を通す機会をえて、ここに改めて批評と紹介の一文を書かせていただいた次第です。この点、著者にその非礼をお詫び致します。

糸屋寿雄著

『幸徳秋水研究』

小松隆 二一

わが国における社会主義運動、アナキズム運動の草分けの一人であった幸徳秋水については、これまで必ずしもその全体像が明らかにされたとはいえないだろう。大逆事件という衝撃的な事件との結びつきもあって、戦前においては幸徳に関する研究のものはほとんどみられなかった。しかし、戦後にいたって社会主義運動・労働運動の基礎史料が公けにされるにつれ、幸徳についての研究も漸く進展をみるようになった。

そのような中で、幸徳に関するまとまった研究としての先鞭をつけたのが、本書の著者である糸屋氏の『幸徳秋水伝』(一九五〇年)であった。そして、その後の諸成果を吸収しつつ旧著を発展させ、ここに再び幸徳についての労作を発表されたわけである。従来、幸徳